

天城の森を守る

(原文)

堀江 啓介 (16 歳)

静岡県

静岡県立田方農業高等学校

「ドーン………」静けさの中に、大きな太鼓の低音が響きます。

これは、天城の自然をテーマに制作された「山鳴り」という曲の始まりで、地震が起きる予兆に山がゴーという音を立てる濃厚な自然の深さを表します。

私が所属する伊豆市天城地区の有志によって結成された天城連峰太鼓で、父は打頭を務めています。メンバーの多くは、林業に携わり、自然の営みの中で仕事をし、日常で感じる自然の情景を曲に落とし込みます。そして、それぞれの意見と感性を大切にしながら、活動を続けてきました。

父は、背中で語るタイプの間人で、太鼓の活動でも森林組合でもメンバーから慕われ、人望のある、カッコいい、憧れの存在であり、私の目指す存在でもあります。

物心がついた頃から父とともに山野を歩いてきた私にとって、天城の山に颯爽と分け入り、段取りよく伐採の準備に取り掛かる。そして、的確に伐採し、高性能林業機械を操縦し、次から次へと伐出していく姿は、まるで魔法のようでした。父が地域に導入したこのシステムは、低コストで加工木材を量産でき、天城の森を守るものでした。

日本人は古くから森のめぐみを受けて生活してきました。天城の森も同様です。

資源としての木材生産やきのこなどの林産物を生産する場となるだけでなく、国土保全機能や水源涵養機能などの多面的な機能を果たし、長く私たちの生活の基盤を支えてきたものです。

その中で、父や祖父、地域の方々に今の現状を質問してみると、天城の森は、人工林であるため、次世代のため、管理作業をしていくことが重要で欠くことのできないものだとなりました。しかし、木材価格の下落や後継者不足などにより、人の手が入らない状態が続き、野生動物が生息している山（場所）と人々が生活している里山との距離が近くなってしまいました。

特にシカによる被害は深刻で、樹皮は剥ぎ取られ、植物は食べつくされ、その現場は見るに堪えません。

樹木が枯れ、表土が無くなった山は悲惨です。保水力が低下し、森林の持つ機能が失われ、台風などの土砂被害に耐えることができない状態となり、大規模な災害を引き起こす場となってしまうのです。

私たちはどうすればいいのでしょうか

森林に人の手が入り、正しい管理をしながら、木材を利用し、「天城の森」を守ることは喫緊の課題

であり、今自分がやらなければならないことの思いを父に話し、将来について語り合いました。

現在、木材業界では、端材や間伐材を有効活用すべく、さまざまなアイデアで製品を誕生させています。

そのひとつが、ペレット燃料です。端材や樹皮を粉碎し、固めたものを、ストーブなどの暖房器具の燃料にするのです。このような「バイオマスエネルギー」を化石燃料の代わりに可能な限り使用すれば、環境負荷を軽減することに繋がり、山は宝の山になるはずです。その他にも、木材をチップ化して再び固め、自由な大きさの素材を作り、その密度によって強さも調整できる「パーティクルボード」があり、木材利用の可能性が広がりをみせています。地方に埋もれている資源を見出し、活用していくところ、私のやるべきことだと決意したのです。

今日まで、継承された文化にこそ価値があるものなのだと、私は思います。

「天城の森を守りたい!!」。父の背中を追った私の夢は、少しずつ具体的になってきました。

将来は地域林業を支え、「天城の森」の守り人として自然を活かし、太古から人々を守り育てた森や文化を次世代に繋げていきます。私の一歩はわずかであっても、この一歩を踏み出すことで地域や国が変わっていくものとなればと思います。

私の一歩が、天城連峰に響く一番太鼓になることを期待します。